

丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書

2017

姫路市教育委員会

序

姫路市内には、約1,200か所を数える遺跡が所在しております。本市ではこれらを貴重な歴史遺産として後世に伝えていくため埋蔵文化財の発掘調査、整理、研究や展示などの公開事業を実施し、その保存と継承に努めております。この度発掘調査を実施しました勝原区下太田の周辺は、国指定史跡瓢塚古墳や、兵庫県指定史跡の下太田廃寺をはじめ、姫路市の主要な遺跡が多く所在し、播磨の歴史を語る上で欠かすことのできない場所です。この度の調査成果は、地域の歴史解明に新たな展開をもたらすことと存じます。

最後に、事業実施にあたり多大なご協力を賜りました関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成29年(2017年)3月
姫路市教育委員会
教育長 中杉隆夫

—目次—

序・目次・例言

第1章 調査に至る経緯と調査地の位置	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査地の位置と周辺の遺跡	1
第2章 調査の成果	
1. 調査の概要	1
2. 弥生時代から古墳時代初頭の遺構	1
3. 古墳時代後期から奈良時代の遺構	2
4. 平安時代末から室町時代の遺構	2
第3章 総括	3

—例言—

1. 本書は、兵庫県姫路市勝原区丁及び下太田に所在する丁・柳ヶ瀬遺跡(遺跡番号:020327)の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査(調査番号:20160232)は、事業者からの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。報告書の編集は、姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが担当した。
3. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
4. 土層名は、農林水産省農林水産技術会事務局・『新版標準土色帳』(1999年度版)に準拠した。
5. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種は以下のように呼称した。
ピット→SP 土坑→SK 溝→SD 竪穴建物跡→SI 掘立柱建物跡→SB 井戸→SE
6. 本報告に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターに保管している。

第1章 調査に至る経緯と調査地の位置

1. 調査に至る経緯

姫路市勝原区下太田字狭間328番2他において、宅地造成工事が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが、丁・柳ヶ瀬遺跡(遺跡番号:020327)に近接していることから、平成28年(2016年)6月2日に試掘調査(調査番号:20160093)を実施した。調査は2×2mの試掘坪を6箇所、工事予定地内に設定し実施した。その結果、溝状遺構及び弥生土器等を確認し、埋蔵文化財包蔵地であることが判明した。このことから、包蔵地の範囲変更手続き、保存協議を行ったうえで、現地保存が不可能な範囲を対象に本発掘調査を実施することとなった。調査期間は、平成28年(2016年)8月30日～11月7日である。

調査は事業者の委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。

2. 調査地の位置と周辺の遺跡

丁・柳ヶ瀬遺跡が所在する姫路市勝原区丁及び下太田は、揖保川の支流である大津茂川の東岸に位置する。近辺は、『播磨国風土記』に登場する「大田里」に比定されている。「大田里」の項には、渡来人の居住を示す記述があり、埋葬施設が穹窿式の横穴式石室である丁山頂古墳や、7世紀半ばから後半の創建とされる下太田廃寺など渡来人との関わりを示唆する遺跡が多く知られる。また、付近は国指定史跡塚原古墳や山戸4号墳など古墳時代前期の古墳が集中して所在する。集落遺跡も多数分布し、その中でも今回の調査地が含まれる丁・柳ヶ瀬遺跡は、兵庫県教育委員会が昭和55年に実施した西汐入川の河川改修工事に伴う発掘調査において縄文時代から中世の遺物が出土しており、市内の集落跡の中でも存続時期が長い拠点的な集落であることが判明している。また、この調査では、「大伴」と書かれた墨書土器も出土しており、聖徳太子によって揖保郡内の水田司に任じられたとされる大伴連との関わりが指摘されている。

第2章 調査の成果

1. 調査の概要

本発掘調査は、開発区域の下水道及び擁壁設置箇所のうち、遺跡に影響が及ぶ243㎡を対象として実施した。調査範囲のうち、西側の擁壁掘方を1区、南側の下水管敷設範囲を2区、北側の下水道管及び擁壁の一部を3区とし、屈曲部等で枝番号を付した。調査区の配置については、図2のとおりである。

基本層序は、1、2区については、現況地盤から耕土、床土を経た約20cm下で、黄色細砂層を検出した。標高は、TP6.2m前後である。2-1区の東端から2-2区にかけては、自然流路もしくは地形の落ちに堆積した灰褐色土層が遺構検出面となっていた。この層は、時期の特定が不可能な土器細片が微量混入する。3区のうち西側は1、2区とはほぼ同様の堆積状況であったが、東側については、耕作土直下で0.8m程度の盛土を観察した。盛土のうち上層(1層)からは備前焼片が出土しており、それより新しい時期の遺物が確認できなかったことから、この層の形成は江戸時代以前の可能性もある。遺構検出面は2-2区と同様の灰褐色土層で、標高はTP.6.5m前後と若干高くなっていた。

検出した遺構は、弥生時代中期から古墳時代初頭の竪穴建物跡・溝・土坑、古墳時代後期から奈良時代の掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝、平安時代末から室町時代の掘立柱建物跡・溝・土坑・井戸などである。柱穴をのぞく遺構の詳細は、検出遺構一覧(表1・2)に掲載している。以下、時代ごとに遺構の概要を述べる。

2. 弥生時代から古墳時代初頭の遺構

竪穴建物跡14棟、溝2条、土坑2基を検出した。

竪穴建物跡は、大きく弥生時代中期と古墳時代初頭の時期に分けられる。前者は、SI3、SI6-1、SI10-1、SI10-2、SI11、後者は、SI1、SI6-2、SI7-1、SI7-2、SI8、SI9である。SI2～5、SI12については、出土遺物が細片であるため遺構の時期が判然としない。弥生時代中期の竪穴建物跡のうち、SI3とSI6-1については、燃焼施設が|○(イチマル)型中央土坑であった。また、古墳時代初頭の竪穴建物跡のうちSI1は、東壁から80cm分を検出したのみであったが、建物部材とみられる炭化材が出土した。SI1の特徴は、床面の南側約3分の1の範囲が15cm程下がっていたことで、この部分の床は未完成であったとみられる。断面観察によれば炭化材を含む5、6層が途切れ

ずに続いていることから、建物が焼失する直前の状況を示している可能性が高く、床面を構築する途中で建物が燃えたものと想定できる。炭化材の直上及び15cm上層で検出した炭層(2層)に土器の集積を確認したことから、この出火が、過失か故意かを含めた検証が必要だと考える。また、古墳時代初頭の堅穴建物跡は床面の下を一旦掘り下げた後、盛土で床面を構築している状況を確認しているのに対し、弥生時代中期の例は厚さ5cm以下の部分的な貼床のみであることから、堅穴建物の構築工程の差異についても今後検討を要する。

溝は、SD8、SD14ともに南北方向の主軸をもつ。出土遺物から弥生時代中期中葉の遺構であると判断した。

2-2区で検出した土坑SK12では、甕を主体とする土器集積を確認した(図12・図14、図25-17~23)。甕は弥生時代のいわゆる“タタキ甕”の形態・技法で製作されているが、出土遺物全体の年代観からは古墳時代初頭の時期があてられる。

3. 古墳時代後期から奈良時代の遺構

掘立柱建物跡5棟、柱穴、土坑7基、溝3条を検出した。

掘立柱建物跡は、1-1区で3棟、3-3区で1棟分を確認した(図3・図4・図22・図23)。SB1は主軸をN-3°・Eにとる。3間分の柱列を確認したのみで、建物跡が列の東西どちらに伸びるのかは不明である。SB2は、主軸をN-7°・Eにとり、2間分を検出した。SB3は、主軸をN-10°・Eにとる。建物の北東隅と想定している柱跡が調査区外で未確認であることから断定はできないものの、東西1間、南北4間以上の建物跡を想定している。SB5、SB6は、それぞれ主軸をN-3°・E、N-4°・Eにとる東西方向の柱列である。建物跡が列の南北どちらに伸びるのかは不明である。これらの建物の時期は、掘方埋土内の土器が細片のうす少量であることから断定はできない。ただ、SB2、SB6は、奈良時代の遺物が出土していることから、奈良時代以降であることは確実である。

この時期の遺構については、調査区全体で柱穴を100基以上検出していること、周辺の調査成果から、調査区一帯に掘立柱建物跡が広く分布することは明白である(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第22集、第52集)。調査範囲が狭小であることから建物跡に復元できたものは少なかったが、3-1区の東側、3-3区において、一辺が1m~1.8mと大規模な掘方を持つ柱穴が検出された点は注目される(図16~18・図22・図23)。これらの遺構は、2基が切り合う例を見ると、上層の柱穴の方がより規模が大きくなり、平面の方形志向が明確である。掘方埋土についても、5~10cmごとに異なった土を交互に埋めている状況が観察できた(SP95-2、100-1、144)。また、SP148では、掘方の上面に厚さ5~10cmの扁平な石が敷き詰められた状況を確認している。これらの柱穴の時期については、出土遺物が少量かつ細片であるため断定はできないが、奈良時代以前の遺物のみであること及び周辺から平安時代の遺物、遺構が全く確認されていないことから、奈良時代の遺構と推測している。

このほか、2-2区で検出したSD12の埋土からは7世紀後半の須恵器杯、暗文が施されたいわゆる都城型の土師器杯、皿などがまとまって出土している(図14・図25-25~34)。この遺構は、南北方向に主軸を持つ溝の形状をしているが、深さ20cm程度と浅く、自然の落ちに土が堆積した状況を示す。埋土内には比較的大きな土器片が多く、炭や焼土片も目立つことから、建物焼失後の整地土層である可能性が推測される。3-1区のSK7も同様の特徴を持つ(図15・図16)。また、SD12、SK7共に遺構の下層から検出した柱穴と上層から掘込まれている柱穴があることから、7世紀後半から奈良時代にかけて掘立柱建物が数回建替えられ、存続している状況が想定される。

4. 平安時代末から室町時代の遺構

掘立柱建物跡1棟、柱穴、土坑1基、溝8条、井戸1基を検出した。

このうち掘立柱建物跡SB4は、1-1区で確認した(図3・図4)。検出した範囲は、南北3間(6.0m)、東西1間(2.2m)の範囲である。出土遺物から、平安時代末から鎌倉時代(12~13世紀)の時期があてられる。

溝のうち、SD13は、幅7.7mの範囲でコの字状に屈曲しており、両辺の溝は北方向に伸びている。溝の幅は、0.8~0.9m、断面形状は方形に近い逆台形である。溝の埋土からは、土師皿や須恵器、草食動物の歯が出土している。土師皿は完形に復元できるものが多く、平安時代末から鎌倉時代(12~13世紀)の遺物である(図15・図25-37~39)。SD5は幅0.35mで、溝の中は拳大より小さな円礫が充填されていた(図9)。出土した備前焼片から、遺構の時期は室町時代と推測される。土坑及び井戸は遺構の時期を示す遺物が確認できなかったため、詳細な時期は不明であるが、遺構の埋土から室町時代以降であると推測する(図15)。

第3章 総括

今回の発掘調査では、弥生時代中期から古墳時代初頭の竪穴建物跡・溝・土坑、古墳時代後期(7世紀後半)から奈良時代の掘立柱建物跡・柱穴・溝・土坑、平安時代末から室町時代にかけての掘立柱建物跡・柱穴・溝・土坑・井戸などを検出した。なかでも、2-2区、3-1区、3-3区で確認した、古墳時代後期の建物排絶後の堆積土層と推測されるSD12、SK7及びそれ以前後する時期の柱穴は、いわゆる都城型の土師器が一定量出土すること、掘方が1辺1.8mを越す大型の柱穴を検出したことなどからも、昭和55年の発掘調査において河内道から出土した「大伴」と書かれた墨書土器を使用していた集団との関わりが示唆される。

(参考文献)

- (1) 岡崎正雄・深井明比古編『丁・柳ヶ瀬遺跡』1985 兵庫県教育委員会
 - (2) 丁・柳ヶ瀬遺跡 姫路市埋蔵文化財センター調査報告第22集』2014 姫路市教育委員会
 - (3) 丁・柳ヶ瀬遺跡 姫路市埋蔵文化財センター調査報告第52集』2017 姫路市教育委員会
 - (4) 長友朋子・田中元浩「3.西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年-播磨編-』2007 大手前大学史学研究所
 - (5) 多賀文治「三津田中遺跡の竪穴住居について」『三津田中遺跡第6分冊』1996 兵庫県教育委員会
 - (6) 古代の土器研究会編『都城の土器1 都城の土器集成』1992 古代の土器研究会
- ※ 土器の種類分類および時期区分については、弥生時代～古御宇時代初頭(注4)、古御宇時代後期～奈良時代(注6)に準拠した。
 ※ 竪穴建物跡の○(イチョム)型中央土坑の名称及び予定図(注6)に準拠した。

遺構名	調査区	規模(検出範囲)	平面形	屋内施設	時期	出土遺物	備考
S11	1-1区	南北4.75m、東西(東壁から0.75m)、深0.25m(床面)・0.5~0.6m(掘削深)	方形	不明	古墳時代初頭(注内土器併用期)	土師器類 磁石 ※図24-7~10	遺失住居
S12	3-3区	東西(西壁から2.8m)、南北(1.1m)、深0.15m(床面)・0.3m(掘削深)	不明	不明	不明	弥生土器断片	S13~S12~S15~S14
S13	3-3区	東西(2.8m)、南北(1.1m)、深0.1m(床面)・0.05m(掘削深)	方形?	掘削施設: ○型中央土坑 土坑(S13-SK1): 東西1.7m、南北0.3m、深0.1m ○土坑(S13-SK2): 東西0.8m、南北0.4m、深0.15m	弥生時代中期後葉?	弥生土器断片	
S14	3-3区	東西(東壁から1.7m)、南北(1.1m)、深0.1m(床面)	円形?	不明	不明	弥生土器類(弥生時代中期中葉)	S110-1と同一遺構の可能性あり
S15	3-3区	西壁から(0.5m)、深0.2m(床面)・0.3m(掘削深)	方形?	不明	不明	弥生土器断片	
S16-1	3-1区	東西(西壁から4.5m)、南北(0.6m)、深0.2m(床面)	不明	掘削施設: ○型中央土坑 土坑(S16-1-SK1): 東西0.24m、南北(0.44m)、深0.05m ○土坑(S16-1-SK2): 直径0.6m、深0.03m	弥生時代中期後葉	甕、壺 ※図24-5、6	S16-1~S16-2
S16-2	3-1区	東西5.0m、南北(1.5m)、深0.3m(床面)・0.7m(掘削深)	隅丸方形	高床部有 掘削施設: ○型中央土坑 土坑: 不明 ○土坑(S16-SK1): 東西0.7m、南北(0.6)m、深0.52m 主柱穴4基(内2基検出)	古墳時代初頭	壺、高杯 ※写真13	
S17-1	3-1区	東西4.7m、南北(1.1m)、深0.05m	方形	不明 主柱穴4基(内2基検出)	弥生時代後期?	弥生土器断片	S17-2に備土。拡張して同位置に構築。SD13
S17-2	3-1区	東西4.1m、南北(1.1m)、深0.1m(床面)・0.4~0.5m(掘削深)	方形	不明 主柱穴4基(内2基検出)	弥生時代後期?	弥生土器断片	S17-2~S17-1
S18	2-1区	東西(西壁から3.3m)、南北(1.2m)、深0.1m(床面)・0.35m(掘削深)	方形	高床部有 掘削施設: ○型中央土坑 土坑: 不明 ○土坑(S18-SK1): 東西0.63m、南北0.53m、深0.4m	古墳時代初頭	土師器類、鉢、高杯等 ※図24-11~16	S D9、SD10:より削平
S19	3-1区	東西6.1m、南北(1.1m)、深0.4m(床面)・0.7m(掘削深)	隅丸方形	高床部有 主柱穴4基(内1基検出)	古墳時代初頭	断片	
S110-1	3-1区	東西(西壁から7.1m)、南北(1.1m)、0.3m(床面)	円形?	不明	弥生時代中期後葉	壺、甕、鉢、高杯等 ※写真13	S14と同一遺構?
S110-2	3-1区	東西(0.95m)、南北(1.1m)、深0.2m(床面)・0.3m(掘削深)	円形?	不明	弥生時代中期後葉	壺、甕、高杯等 ※図24-1、2	S14と同一遺構?
S111	3-1区	東西(東壁から1.3m)、南北(北壁から0.3m)、深0.15m(床面)	方形	不明	弥生時代中期	壺、甕	SK6を変更
S112	2-1区	東西(西壁から1.3m)、南北(南壁から0.4m)、深0m	隅丸方形	不明	不明	—	居室の柱跡のみ残存

表1 検出遺構一覧(1)

遺構名	調査区	規模(検出範囲)	平面形	主軸	時期	出土遺物	備考
SK2	2-1区	東西(0.44m)、南北(0.45m)、深0.15m	円形	—	古墳時代後期(7世紀後半)	弥生土器、須恵器、土師器 燵片	
SK3	3-1区	直径0.32m、深0.25m	円形	—	室町時代以降	—	S16-2を切る
SK6	3-1区	東西0.52m、南北(0.9m)、深0.45m	不整形	—	古墳時代後期	弥生土器、須恵器、土師器 燵片	S110を切る SD17と同一遺構の可能性あり
SK7	3-1区	東西2.15m、南北(1.15m)、深0.4m	不整形	—	古墳時代後期(7世紀後半)	弥生土器燵片、須恵器、土師器 燵片	S19を切る 燵片、埴土、土器片多量含む
SK8	3-1区	東西0.54m、南北(0.45m)、深0.3m	楕円形	—	奈良時代	弥生土器、須恵器、土師器 燵片	SK7、SK9を切る
SK9	3-1区	東西0.33m、南北(0.3m)、深(0.2m)	楕円形	—	弥生時代中期中葉	燵片	
SK11	3-1区	東西0.75m、深さ0.3m	不明	—	奈良時代	須恵器24-3 深き器真直垂 ※図25-36	S16-1を切る、調査区北壁で 断面のみ検出
SK12	2-2区	東西(1.35m)、南北(0.54m)、深0.23m	長楕円形	—	弥生後期～古墳時代初期(区内式併存期)	弥生土器燵片、高杯、壺、 土師器 ※図25-17～23	
SK13	2-2区	東西(0.95m)、南北(0.9m)、深0.3m	不明	—	古墳時代後期	弥生土器、須恵器、土師器 燵片	SK6の東端 調査区北側断面 45層
SK14	2-2区	東西(0.9m)、南北(0.9m)、深0.4m	不明	—	古墳時代後期(7世紀後半) ～奈良時代	弥生土器、須恵器、土師器 燵片	SP140の西端 調査区北側断面 51層
SD1	1-2区	幅3.5m、深0.4m	—	N-30°-60°-#	平安時代末～鎌倉時代	須恵器、土師器燵片	
SD1-2	1-2区	幅0.5m、深0.05m	—	N-60°-E	平安時代末～鎌倉時代	須恵器、土師器燵片	
SD2	2-1区	幅2.2m、深0.4m	—	N-5°-#	平安時代末～鎌倉時代	須恵器、土師器燵片	SD1の続き?
SD3	2-1区	幅1.0m、深0.25m	—	N-0°-#	平安時代末～鎌倉時代	土師器羽釜、須恵器燵片	
SD5	2-1区	幅0.35m、深0.32m	—	N-10°-#	室町時代	丸瓦、備前焼燵片	1cm～拳大程度の円礎を充填
SD8	2-1区	幅1.0m、深0.27m	—	N-12°-#	弥生時代中期中葉	壺、壺	
SD9	2-1区	幅1.1m、深0.18m	—	N-10°-#	室町時代	須恵器、土師器、陶器燵片	
SD10	2-1区	幅3.7m、深0.6m	—	N-10°-#	室町時代	須恵器、土師器、陶器燵片	
SD12	2-2区	幅4.9m、深0.2m	—	N-58°-E	古墳時代後期(7世紀後半)	弥生土器燵片、須恵器、土師器 燵片・皿、高杯 ※図25-25～34	燵片、埴土、土器片多量含む
SD13	3-1区	幅0.8～0.9m、深0.26m、 東西7.7m	—	N-5°-E	平安時代末～鎌倉時代	土師器燵片、須恵器燵片 数枚(破) ※図25-37～39	コの字状に屈曲する
SD14	3-1区	幅0.52m、深0.1m	—	N-3°-E	弥生時代中期中葉	壺、壺燵片	
SD15	3-1区	幅0.6m、深0.2m	—	N-5°-#	弥生時代～古墳時代初期	弥生土器燵片	
SD16	3-1区	幅0.05m、深0.45m	—	N-20°-#	古墳時代後期	須恵器燵片、弥生土器、土師器 燵片 ※図25-24	
SD17	3-3区	幅(0.74m)、深0.46m	—	N-20°-#	古墳時代後期	須恵器燵片 弥生土器燵片、高杯(弥生時代 中期中葉)	SK6と同一遺構の可能性あり
SB1	1-1区	南北(7.2m)、(3間) 柱穴間方0.25～0.5m、柱 径0.15～0.2m	柱穴間方：隅丸 方形	N-3°-E	古墳時代後期(7世紀後半)	弥生土器、須恵器、土師器 燵片	SP41、42、44、46
SB2	1-1区	南北(5.0m)、(2間) 柱穴間方0.4～0.8m、柱 径0.15～0.2m	柱穴間方：隅丸 方形	N-7°-E	奈良時代	須恵器燵片、弥生土器、土師器 燵片 ※図25-35	SP23、24、25
SB3	1-1区	南北(8.0m)、東西(2.0m)、(4間×1間) 柱穴間方0.6～0.7m、柱 径0.15～0.2m	長方形 柱穴間方：楕円形 隅丸方形	N-10°-E	古墳時代後期(7世紀後半)	弥生土器、須恵器、土師器 燵片	SP18、19、20、21、22
SB4	1-1区	南北(6.0m)、東西(2.2m)、(3間×1間) 柱穴間方0.2～0.4m、柱 径0.1m	柱穴間方：円形	N-2°-#	平安時代末～鎌倉時代	弥生土器、須恵器、土師器 燵片	SP1、2、3、4、5
SB5	3-3区	東西(4.0m)、(3間) 柱穴間方0.5～0.6m、柱 径0.3m	柱穴間方：方形	N-3°-E	古墳時代後期(7世紀後半)	弥生土器、須恵器、土師器 燵片	SP95-1、99、98-2、100-2
SB6	3-1区	東西(7.1m)、(2間) 柱穴間方0.5～0.7m、柱 径不明	柱穴間方：方形	N-4°-E	奈良時代	弥生土器、須恵器、土師器 燵片	SP132、135、171
SE1	3-1区	直径2.1m、(深さ0.9m)	円形	—	室町時代以降	平瓦	

※()内の数値は、遺構全体の規模ではなく、検出範囲の数値である。

※計測の対象外とした項目は、—を表記している。

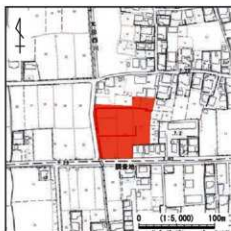
表2 検出遺構一覧(2)

番号	種別	形状	出土遺構	口径	底径	高さ	色顔(外)	色顔(内)	構成	胎土	残存状況	調整(外)	調整(内)	備考	
1	弥生土器	皿	3-1R	S110 No.15	19	6.2	14.9	2.5YR/1	10YR/2	普通	φ2mm以下の砂粒を含む	ハケ ナデ	ハケ ナデ		
2	弥生土器	高杯	3-1R	S110 No.16	—	14.2	(15.4)	2.5Y4/1	10YR/4	普通	φ2mm以下の砂粒を含む	口縁部～胴 部1/2	ミガキ		
3	弥生土器	皿	3-1R	SK9 No.1	22	—	(10.3)	10YR7/1	10YR/1	普通	φ2mm以下の砂粒を含む	口縁部～胴 部1/2	口縁部 漆喰 列点文、円形 穴文	口縁部 漆喰 列点文、円形 穴文	
4	土製品	分銅砂 土製品	2-1R	SP8-1	—	—	—	7.5YR/6	7.5YR/6	普通	φ1mm以下の砂粒を多く含む	1/3	不明	調整文	後述の遺構 に属入
5	弥生土器	皿	3-1R	S16-1 No.4	23.3	—	(9.8)	10YR/2	10YR/3	普通	φ5mm以下の砂粒を含む	口縁部～胴 部1/4	ハケ 口縁部 漆喰 列点文 線部：漆喰 列点文	ハケ 口縁部 漆喰 列点文 線部：漆喰 列点文	
6	弥生土器	皿	3-1R	S16-1 No.3	23.4	—	(6.7)	10YR/4	10YR/4	普通	φ2mm以下の砂粒を含む	口縁部～胴 部1/2	口縁部 漆喰 文字 線部：漆喰 列点文	ナデ ハケ	
7	石製品	砥石	1-1R	S11 5層	3.2	4.0	9.9	7.5YR/1	—	—	—	—	—	—	
8	弥生土器	皿	1-1R	S11 No.2	17.6	—	(3.2)	10YR/4	10YR/4	普通	φ1mm以下の砂粒をわずかに含む	口縁部1/4	ナデ ハケ	ナデ	
9	弥生土器	皿	1-1R	S11 2層	—	—	(6.7)	10YR/3	2.5Y/1	普通	φ3mm以下の砂粒をわずかに含む	1/12	ナデ ハケ	ナデ ハケ	
10	弥生土器	皿	1-1R	S11 No.4	16.9	—	(5.8)	2.5Y7/1	10YR/2	普通	φ3mm以下の砂粒を含む	口縁部1/4	ナデ	ナデ	
11	弥生土器	高杯	2-1R	S18 土器No.2	12.9	—	(9.3)	7.5YR/6	7.5YR/6	普通	φ2mm以下の砂粒をやや多く含む	口縁部～胴 部上半 完 部	ナデ ハケ	ナデ ハケ	線部
12	弥生土器	高杯	2-1R	S18 土器	22.6	—	(4.75)	7.5YR/4	7.5YR/4	普通	φ2mm以下の砂粒をやや多く含む	胴部1/6	ナデ	ナデ	線部
13	弥生土器	鉢	2-1R	S18 土器No.1	24.6	—	(12.4)	5YR/6～ 2.5YR/1	7.5YR/4	普通	φ3mm以下の砂粒を多く含む	口縁部～胴 部1/6	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	
14	弥生土器	皿	2-1R	S18 土器No.2	12.6	1.7	15.0	7.5YR/4	5YR/6	普通	φ3mm以下の砂粒をやや多く含む	胴部1/4	ナデ	ナデ	
15	弥生土器	皿	2-1R	S18 土器	13.4	—	(21.1)	7.5YR/3	7.5YR/4	普通	φ2mm以下の砂粒を多く含む	1/5 底面欠損	ナデ	ナデ	
16	弥生土器	皿	2-1R	S18 土器No.1	17	—	24.3	5YR/3 ～ 10YR/5/1	2.5Y7/4	普通	φ3mm以下の砂粒をやや多く含む	口縁部から 胴部の1/3 程度欠損	ナデ ナデ	ナデ ナデ	外周下方に 溝彫、スス 付着
17	弥生土器	漆台	2-2R	SK12 No.1	—	17.5	3.1	2.5YR/2	10YR/2	普通	φ2mm以下の砂粒を含む	胴部1/6	ナデ 漆喰文 ミガキ	ハケ	
18	弥生土器	漆台	2-2R	SK12 No.1	—	17.5	3.1	2.5YR/2	10YR/2	普通	φ2mm以下の砂粒をやや多く含む	胴部1/6	ナデ 漆喰文	ハケ	
19	弥生土器	高杯	2-2R	SK12 No.1	—	4.6	2.5YR/2	2.5Y7/1	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	胴部1/10	ミガキ	ミガキ		
20	弥生土器	高杯	2-2R	SK12 No.1	14	—	(7.4)	2.5Y7/4	7.5YR/6	普通	φ2mm以下の砂粒を含む	胴部1/4 胴部1/8	ナデ ハケ	ナデ ハケ	
21	弥生土器	皿	2-2R	SK12 No.1	15.9	—	13.5	7.5YR/6	7.5YR/4	普通	φ5mm以下の砂粒をやや多く含む	1/2	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	
22	弥生土器	皿	2-2R	SK12 No.1	12.8	2.2	17.4	2.5YR/2	10YR/2	普通	φ5mm以下の砂粒をやや多く含む	2/3	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	
23	弥生土器	皿	2-2R	SK12 No.1	14.4	3.1	16.4	10YR/4	10YR/3	普通	φ4mm以下の砂粒をやや多く含む	2/3	ナデ ハケ目	ナデ ハケ目	
24	漆器	杯	3-1R	S110 No.14	—	—	(10.3)	N4/ N5/	普通	φ1mm以下の砂粒を少量含む	胴部1/4	口ロナデ 底部へうけり	口ロナデ	漆片観察 欠損 35.8cm	
25	土師器	杯	2-2R	S012	11.2	7.1	3.8	5Y6/1	5Y7/1	普通	φ30mm以下の砂粒を少量含む	1/2	ナデ ミガキ	ナデ 漆文	
26	土師器	皿	2-2R	S012 変型No.1	16.2	—	2.1	7.5YR/4	7.5YR/4	普通	φ1mm以下の砂粒を少量含む	1/4	ナデ ミガキ	ナデ 漆文	
27	土師器	杯	2-2R	S012 変型No.2	16.7	—	5.1	2.5YR/8	2.5YR/8	普通	φ4mm以下の砂粒を少量含む	3/4	ナデ ミガキ	ナデ 漆文	
28	土師器	高杯	2-1R	S012 土器No.2	—	10.2	(7.4)	5YR/6	5YR/2	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	胴部	不明	不明	
29	土師器	杯	2-2R	S012	—	—	(3.9)	10YR/6	10YR/6	普通	φ0.5mm以下の砂粒を少量含む	2/4	ナデ ミガキ	ナデ 漆文	
30	土師器	皿	2-2R	S012 変型No.3	23	20.3	3.3	2.5YR/8	2.5YR/8	普通	φ4mm以下の砂粒を少量含む	1/4	ナデ ミガキ	ナデ 漆文	
31	漆器	杯	2-2R	S012	11.2	7.1	3.8	5Y6/1	5Y7/1	普通	φ30mm以下の砂粒を少量含む	1/2	口ロナデ 底部へうけり	口ロナデ	
32	漆器	杯	2-2R	S012	11.2	7.0	3.3	N7/ N7/	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	3/4	口ロナデ 底部へうけり	口ロナデ		
33	漆器	杯	2-2R	S012	13.5	8.3	5.5	N7/ N7/	普通	φ5mm以下の砂粒を少量含む	口縁部1/4 底部完形	口ロナデ 底部へうけり	口ロナデ		
34	漆器	長圓筒	2-2R	S012 土器No.2	—	—	(12.0)	N4/ N6/～N5/	普通	φ3mm以下の砂粒を少量含む	胴部から胴 部1/2	口ロナデ 列点文(2象)	口ロナデ		
35	漆器	長圓筒	3-1R	SK11 土器No.1	—	9.4	(11.5)	5Y6/1	5Y7/1	普通	φ2mm以下の砂粒を少量含む	胴部～底部 5/6	口ロナデ 底部へうけり	口ロナデ	
36	漆器	皿	1-1R	SP24	—	—	(1.8)	N7/ N7/	普通	φ2mm以下の砂粒を含む	口縁部1/10	口ロナデ	口ロナデ	漆片観察 認められ	
37	土師器	皿	3-1R	S013	8.5	6.2	1.7	10YR/2	10YR/2	普通	φ2mm以下の砂粒を含む	2/3	ナデ	ナデ	
38	土師器	皿	3-1R	S013 No.1	9.1	7.0	1.7	10YR/2	10YR/2	普通	φ1mm以下の砂粒を多く含む	完形	ナデ	ナデ	
39	土師器	皿	3-1R	S013	13.3	10.3	2.9	10YR/2	10YR/2	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	完形	ナデ	ナデ	

※番号は、図24-25及び写真13と対応している

※計測の対象外とした項目は、—を表記している。

表3 出土遺物観察表



1. 丁・柳ヶ瀬遺跡 2. 熊塚古墳 3. 下太田廃寺 4. ツクワ遺跡 5. 川島遺跡 6. 大津茂川床遺跡
7. 櫻神山山頂遺跡 8. 下太田遺跡 9. 櫻神山遺跡 10. 櫻神山3号墳 11. 櫻神山1号墳
12. 朝日山1号墳～3号墳 13. 朝日山城跡 14. 朝日山遺跡 15. 和久遺跡 16. 茶屋遺跡
17. 山戸遺跡 18. 南山戸遺跡 19. 山戸4号墳 20. 山戸1号墳～18号墳
21. 勝山町古墳群1号墳～5号墳 22. 丁山頂古墳 23. 丁古墳群1号墳～5号墳 24. 栗原古墳

図1 調査の位置と周辺の遺跡 (S=1:30,000・1:5,000)

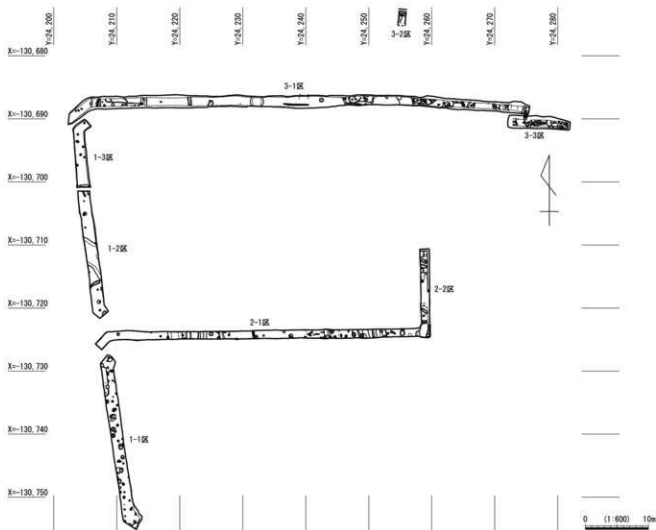
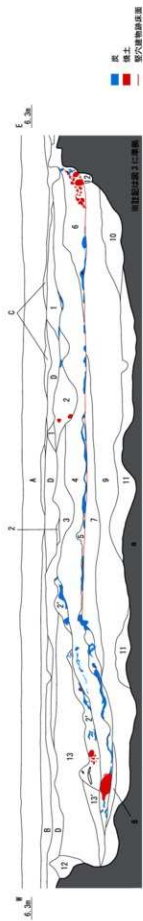


図2 調査区全体図 (S=1:600)



灰化堆积物状况 (5、6 图) 写真

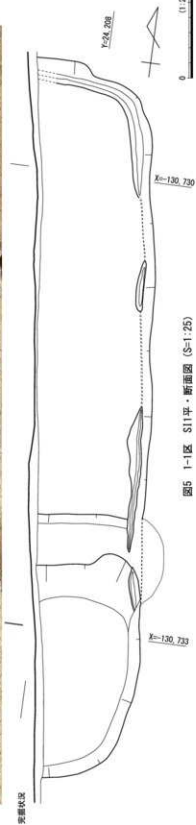


图5 1-1区 S11平·断面图 (S=1:25)

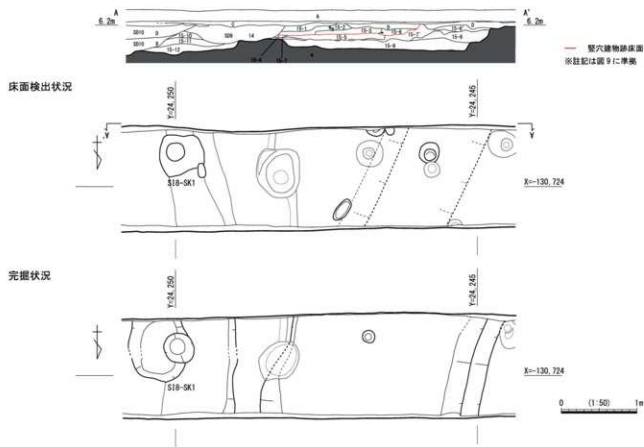


図10 2-1区S18平面図・断面図 (S=1:50)

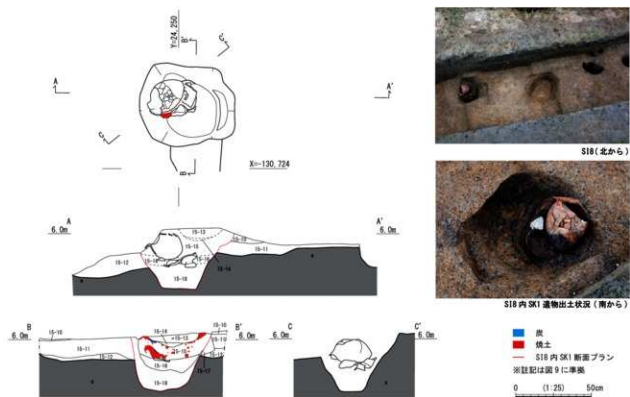
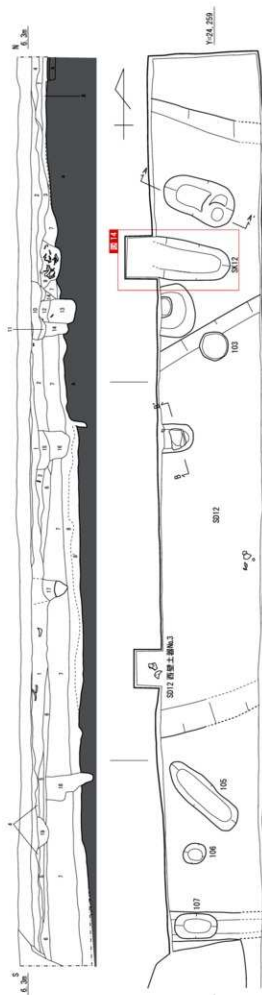


図11 2-1区S18内SK1平面図・断面図 (S=1:25)



X=130.720

X=130.715

(単位)
A. 跡土 ⅡA/
B. 跡土 ⅡB/
C. 跡土 ⅡC/1-1/2
D. 跡土 ⅡD/1
E. 跡土 ⅡE/1-2/1
F. 跡土 ⅡF/1-2/1
G. 跡土 ⅡG/1-2/1
H. 跡土 ⅡH/1-2/1
I. 跡土 ⅡI/1-2/1
J. 跡土 ⅡJ/1-2/1
K. 跡土 ⅡK/1-2/1
L. 跡土 ⅡL/1-2/1
M. 跡土 ⅡM/1-2/1
N. 跡土 ⅡN/1-2/1
O. 跡土 ⅡO/1-2/1
P. 跡土 ⅡP/1-2/1
Q. 跡土 ⅡQ/1-2/1
R. 跡土 ⅡR/1-2/1
S. 跡土 ⅡS/1-2/1
T. 跡土 ⅡT/1-2/1
U. 跡土 ⅡU/1-2/1
V. 跡土 ⅡV/1-2/1
W. 跡土 ⅡW/1-2/1
X. 跡土 ⅡX/1-2/1
Y. 跡土 ⅡY/1-2/1
Z. 跡土 ⅡZ/1-2/1

図12 2-2区 平面図・断面図 (S=1:50)



SP101

A

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m



SP104

A

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m

6.0m



SP112 遺物出土状況 (南西から)



SP112 遺物出土状況 (北東から)

図13 2-2区 柱穴断面図 (S=1:50)

図14 SK12 遺物出土状況 (S=1:25)

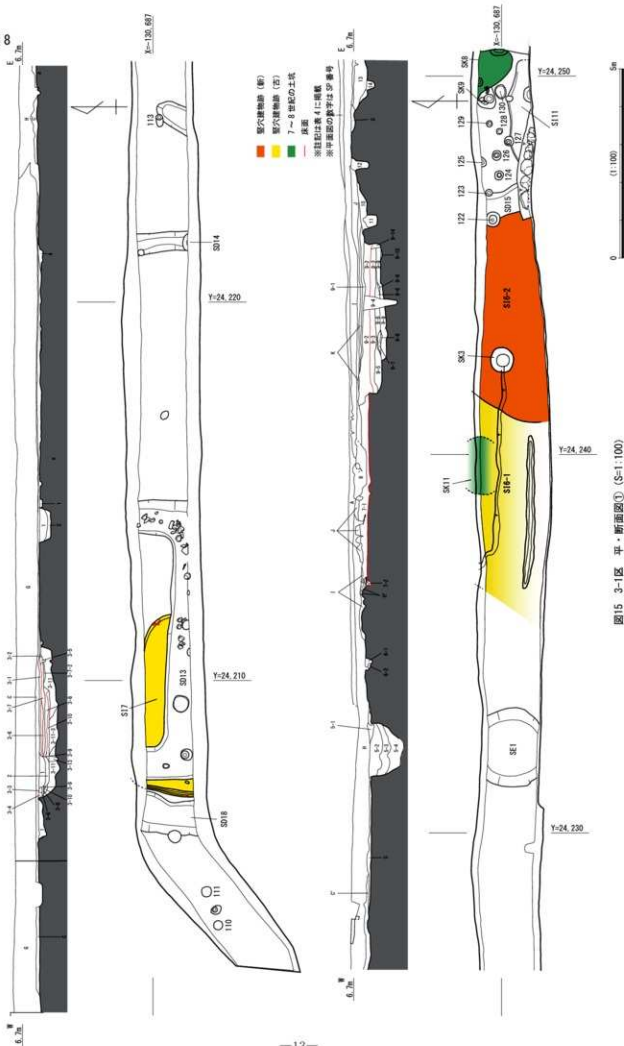


図15 3-1区 平・断面図① (S=1:100)

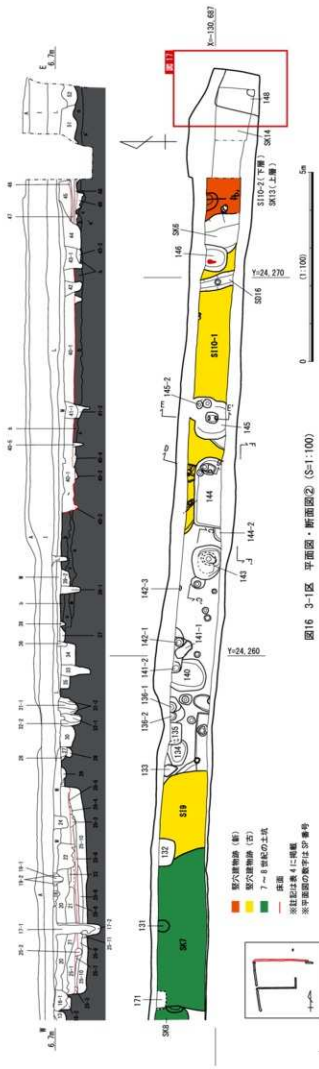


図16 3-1区 平面図・断面図② (S=1:100)

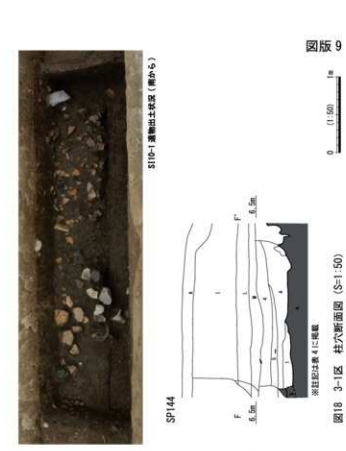


図17 3-1区 SP149平面図・断面図 (S=1:50)

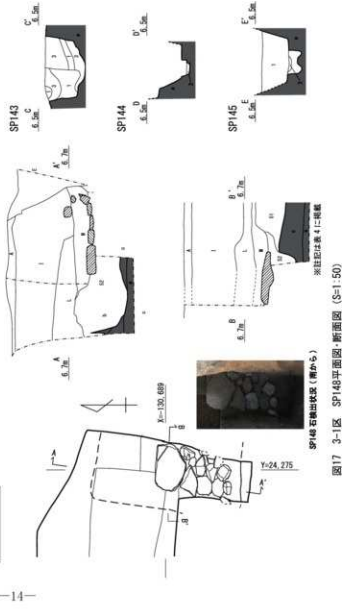


図18 3-1区 柱穴断面図 (S=1:50)

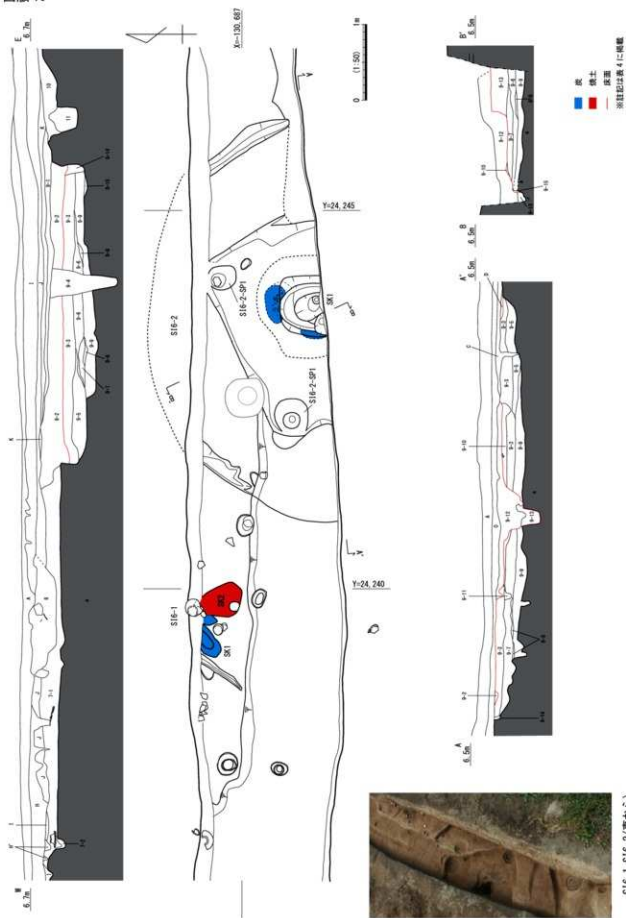


図19 3-1区 S16-1, S16-2平面図・断面図 (S=1:50)

S16-1, S16-2(裏から)



S17(東から)

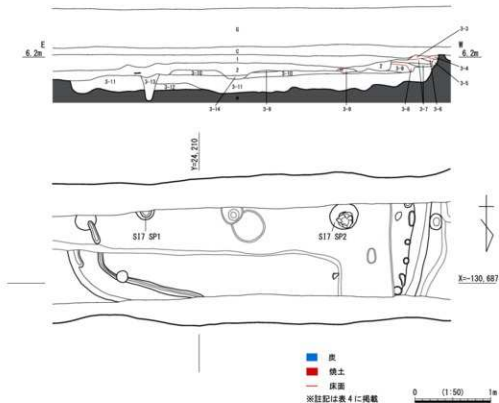
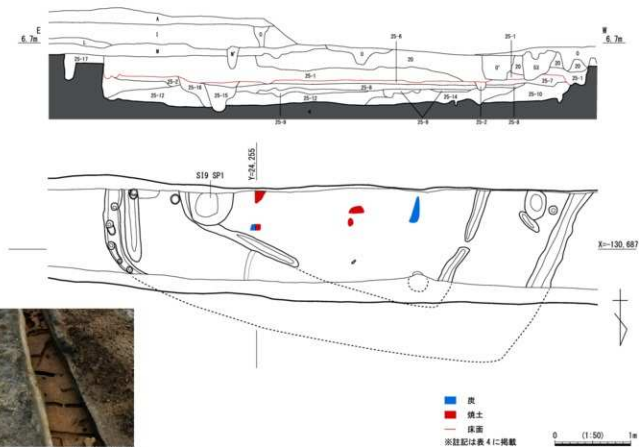


図20 3-1区 S17平面図・断面図 (S=1:50)



S19(西から)

図21 3-1区 S19平面図・断面図 (S=1:50)

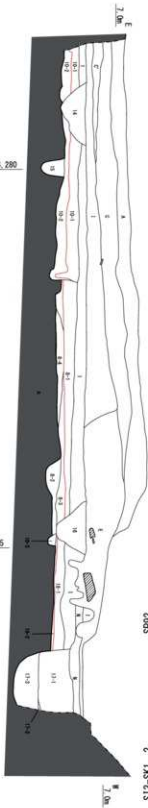
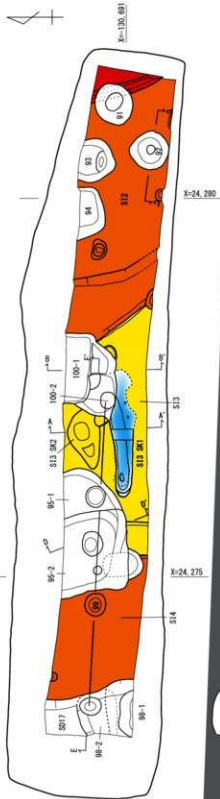
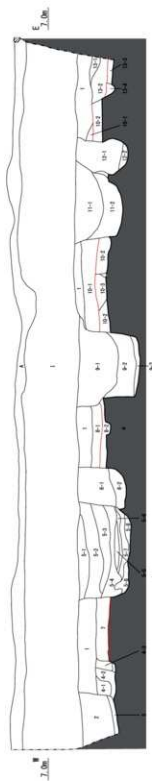


図22 3-3区 平面図・断面図 (S=1:50)



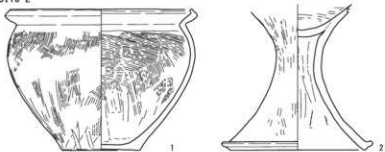
1. 1000.0.7 砂層～埋砂層 埋1.2はS13内902 埋土
2. 1000.6.8 埋砂(5層)フロック 1000.2.埋砂層～埋砂層フロック含む
3. 1000.0.7 埋砂層～埋砂層 埋多量含む S13内181埋土
4. 1000.0.1 フルト、砂面に埋砂層～埋砂層・埋砂層フロック30～40%含む
5. 1000.0.1 フルト、砂面に埋砂層～埋砂層・埋砂層フロック30～40%含む
6. 1000.0.1 フルト、砂面に埋砂層～埋砂層・埋砂層フロック30～40%含む
7. 1000.6.8 埋砂(5層)フロック 1000.2.埋砂層～埋砂層フロック含む

0 (1.00) 1m

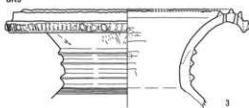
図23 3-3区 遺構断面図 (S=1:50)

图版 14

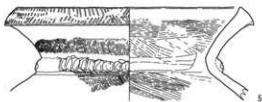
S110-2



SK9



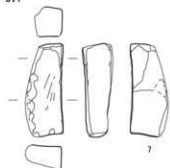
S16-1



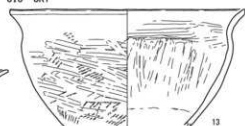
SP88



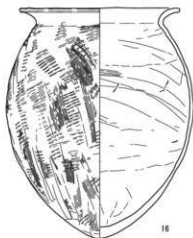
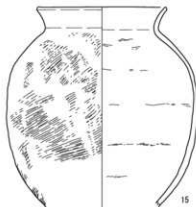
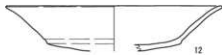
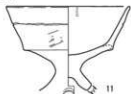
S11



S18 · SK1



S18 ~ SK1



0 (1-4) 10cm

图24 遺物実測図1 (S-1 : 4)

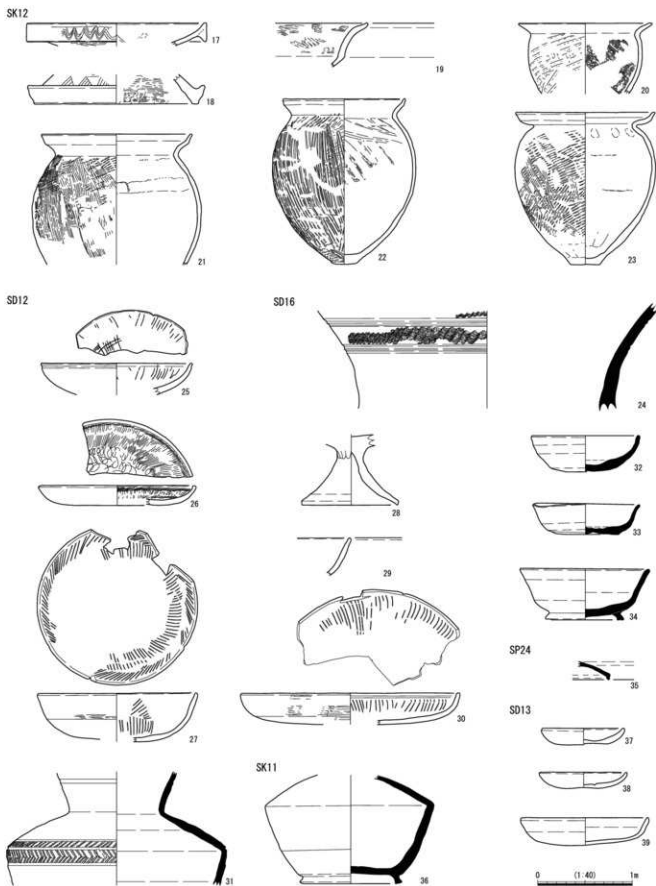


图25 遗物实测图2 (S=1:4)



写真1 1-1区(北から)



写真2 1-2,3区(北から)



写真3 2-1区(東から)



写真4 2-2区(北から)



写真5 3-1区(東から)



写真6 3-3区(西から)



写真7 2-1区SD3(北から)



写真8 2-1区SD5(北から)



写真9 3-1区SK11 遺物出土状況(東から)



写真10 3-1区SP143, 144, 145(北から)



写真11 3-1区SK11断面 遺物出土状況(南から)



写真12 3-3区SP95-2断面(西から)



写真13 出土遺物 ※写真の数字は実測図番号に対応

報告書抄録

ふりがな	よる・やながせいせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第53集							
編著者名	小柴 治子							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地 1 TEL(079)252-3950							
発行年月日	平成 29 年(2017 年)3 月 31 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よる・やながせいせき 丁・柳ヶ瀬遺跡	兵庫県姫路市 橋原区下太田字我明 328 番 2 地	28201	020327	34° 49' 17"	134° 35' 53"	2016. 8. 30 ~ 2016. 11. 7	243 ㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号			
丁・柳ヶ瀬遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴式建物跡、溝	弥生土器、石器 分銅形土製品	20160232			
		古墳時代	柱穴、掘立柱建物跡、 土坑、溝	須恵器、土師器				
		奈良時代	柱穴、掘立柱建物跡、土坑	須恵器、土師器				
		中世	溝、掘立柱建物跡、柱穴	須恵器、土師器、陶器、瓦				

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第 53 集

丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地 1

発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目 1 番地

発 行 日 平成 29 年 (2017 年) 3 月 31 日

印刷・製本 内海印刷株式会社
〒670-0808 兵庫県姫路市白国 5-8-4